

福岡市博物館

アジアの激動と福岡ゆかりの人びと

# 辛亥革命100年「企画展」開催

## 記念館資料3年3カ月ぶり公開



館 報

玄洋111号

平成24年1月1日

発 行

社団法人 玄洋社記念館

郵便番号 810-0062

福岡市中央区荒戸三丁目

6-36 西公園ハイツ201号

電話 (092) 762-2511

FAX (092) 762-2502

### 玄洋社憲則

第一条 皇室ヲ敬戴ス可シ

第二条 本國ヲ愛重ス可シ

第三条 人民ノ権利ヲ固守ス可シ

### 今号の主な内容

- ▽「中野先生顕彰祭」を斎行 2面
- ▽「頭山満翁と玄洋社物故者慰霊祭」を斎行 3面
- ▽辛亥革命100年記念講演会と学術シンポジウム 4面
- ▽福岡市議が、玄洋社に学ぶ会を設立 5面



頭山満翁の肖像写真とその書など多くの玄洋社関係資料が展示された会場

## 郷土の先覚の熱情に感銘

中国近代化の幕開けとなった孫文の「辛亥革命」百年を記念した福岡市博物館（同市早良区百道浜三、酒井龍彦館長）の企画展「アジアの激動と福岡ゆかりの人びと」が、昨年九月二十一日から十一月六日まで開催された。玄洋社記念館寄託の関係資料も多数展示され、来館者は孫文を物心両面で支援した玄洋社先覚の、アジアの開放に向けた熱情に感銘を受けた様子だった。（4・5面に関連記事）

同展は「歴史の教科書に登場しないながらも、アジアを舞台にさまざまな活動をしたゆかりの人びと」をテーマに、また中国・清朝の崩壊から一九二一年の辛亥革命前後までを時代



明石元二郎の三行書と満州義軍の隊旗



孫文が進藤喜平太翁のために揮毫した「明道」の書と孫文の写真

背景に「旧秩序の崩壊から辛亥革命まで」「辛亥革命」の三部構成で「孫文来日」の三冊構成で書や写真、地図、書簡、新聞記事など約八十点を展示した。

このうち半数近くが玄洋社記念館の寄託資料で、孫文の「明道」「博愛」の書や孫文が福岡市を訪れた際の写真など、孫文と玄洋社の強い絆を物語る資料はじめ玄洋社の総帥、頭山満翁や進藤喜平太翁、平岡浩太郎翁の写真、日露戦争で奮闘した満州義軍の隊旗など公開となった。

会期中、個人や中学生の団体など、見学者が大勢訪れた。十月十九日に設立された福岡市議会議員の「玄洋社に政治を学ぶ議員の会」会員も設立総会後、早速、同展を見学。また、同月二十九日に開催された福岡市史講演会の外国人講師からも見学に訪れ、福岡の先人と歴史への認識を深めていたという。

# 中野先生顕彰祭を斎行

## 今も生きる「天下一人を以て…」の教え

戦時下、戦線の拡大に走る東條英機首相の退陣を工作した反骨の政治家、中野正剛先生の偉業を顕彰する「中野正剛先生顕彰祭」(中野正剛先生顕彰会主催)が昨年十月二十二日、福岡市中央区今川一丁目の烏飼八幡宮で執り行われた。同八幡宮境内に立つ中野先生銅像前で式典が行われるのが習わしだが、同日は天候不良で参集殿を会場にした。中野先生の崇敬者はじめ中野先生の縁戚の方々など約六十人が出席された。



厳粛に行なわれた式典



講話をする真理・ヘーゼルウッドさん①と譚璐美さん



を次のように訴えた。

参集殿に祭壇が設けられ、山内勝二郎宮司を司祭に、式典は厳粛に進められた。式典後の挨拶で、同顕彰会の吉村剛太郎理事長は、

「四十二年間の独裁体制を敷いたカタフィー政権の崩壊は、リビア国民一人一人の気持ちが集結された結果であろう。中野先生も太平洋戦争の終結に奔走されたが、権限を一手に握った東條に阻まれた。カタフィー政権崩壊に比べると、中野先生の戦いは孤独な戦いだった。中野先生が母校、早稲田大学で学生に向けて

行った東條弾劾の演説「天

下一人を以て興る」で語ったように、世の中を動かすには世論の結集が必要だ。中野先生は、自裁によって世論の喚起を図ったのだから。国民はこのことを学ばなければならぬと思う」

この後、同じ会場で直会(なおらい)に移り、出席者は、昼食を取りながら歓談した。

平成二十、二十一年の顕彰祭に続いて今回も出席された中野先生の四男、中野泰雄氏(平成二十一年四月逝去)の長女でオーストラリア在住の真理・ヘーゼルウッドさん(62)と、二十一年に続いて出席された、ニューヨーク在住で中国近現代史の分野で活動するノンフィクション作家、譚璐美さんが講話をされた。

「家庭の責任」と日本語の乱れに苦言を呈した。また、自分たちが、オーストラリアで、東日本大震災の被災者支援のために、プロジェクトをつくって寄金を募る活動を進めている事を紹介した。

譚さんは、辛亥革命の経緯などを紹介した後、中国が北京や武漢市で辛亥革命百周年を盛大に祝った事に

「経済成長を遂げた今、中国は国の運営のための新たな指針作りが必要になっている。そこで孫文の三民主義のある部分を引き寄せ、政治的にも社会制度的にも大きく方向転換するのではないかと。分岐点になるのが、今年の辛亥革命百年ではないか」

譚さんは、近く新潮社から「日中百年の群像」を上梓する。孫文を支援した日本人のうち、有名でない人々に光を当てることが努力したという。

出席者は二人の話に興味深く聴いた。

### 進藤喜平太の思い出・第2部

## 「追悼録」から

進藤喜平太翁追憶談 柴田 麟次郎(談)

(前号から続く)

當時の玄洋社の若い者共は議論に激して双方が掴み合うと言う事も決して珍らしい事ではなかったが、その様な時でも先生が一瞥をかけられるときつと止んだものであった。

中には酒ぐせの悪い酒乱のような者もおって、酔うてあばれると吾々でも手を焼くような者がどんなに深く酔うてあばれておる時も先生が出て来られて一瞥かけられるとそれでおさまったのであって、これを見ても先生の感化が尋常一様のものでなかったのが知れる。

僕はその後十九の年に上京し学業半で平岡さんの命で北海道の炭坑の監督に行き、百日間勤めて東京にもどり、後に福岡に帰った。帰って見ると丁度その時豊國炭坑に大火災があつて、豊國炭坑が苦況に立った時で徒らに平岡さんの許に世話になつて居るのも心苦しく、百方努力して三十二年に安永東之助と農商務省の傳習生として渡支、南京で勉強する事になった。

明治三十三年孫文が惠州の同志と共に起つと聞いて革命に参加しようと思ひ、傳習生の身分をなげうち同志と共に画策しておつた。當時は傳習生に對しては毎月農商務省から三十円宛の学費が支給されたが革命に志してからは遂にこれを受け取らなかつた。

それが何ヶ月分もたまって係の者がその處置に困つて何度か受け取るように言うてくる仕末だったが遂に受け取らなかつた。勿論学生に分際で支那の革命に加わるなどとは

# 頭山満翁と玄洋社物故者

## 慰霊祭を齋行

### 福岡市・崇福寺

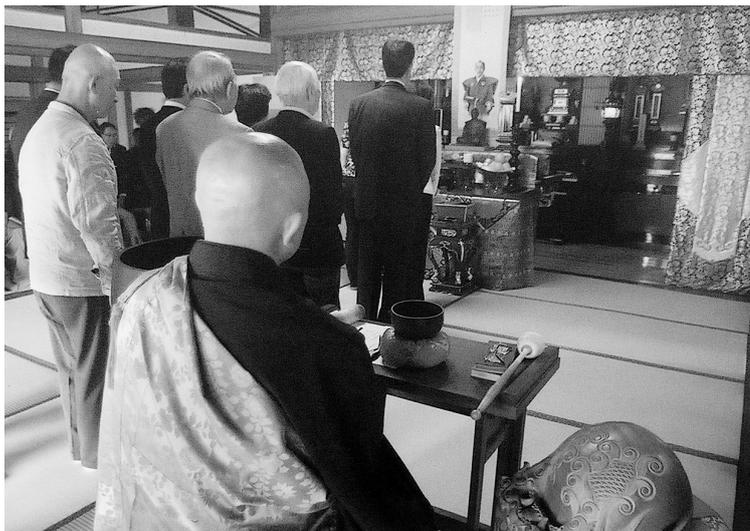


辛亥革命への思いを新たにした慰霊祭

「尺八今古流、明暗流の方々に由る「鈴慕」の献笛。筑前今様二川流・吟道宰相館の方々は詩吟「加藤司書公」を献吟した。「加藤司書公」には、民謡「黒田節」で知られる司書公自身の作

の慰霊祭で、福岡地方史研究会、石瀧豊美会長らの辛亥革命に関する卓話があった。明道会の山崎拓理事長（前自民党副総裁）は挨拶で「辛亥革命で玄洋社はじ

め多くの日本人が近代中国の幕開けに力添えをした。今日の世界情勢を見ると、現在の中国は軍備を拡大し、（ガス田開発に絡んで日本と経済水域の設定に主張の食い違いがある）東シ



司書公の肖像画が掛かる祭壇に焼香する参列者

の外の事だったから、此の事では嚴重に注意されたがそれも聞かずにやって仕舞うたわけだった。此の革命の際に友人の山田純三郎を説いて共に革命に赴いたのであったが、後に彼の兄の山田良政氏に會った時

「柴田君、僕は此の革命に命をかけてやって居るから僕が此の為に死ぬ事は一向いとわれないのだが、君が僕の弟純三郎までを革命に引き入れては困るではないか。兄弟二人を実際に失うた両親のなげきを想像するだけでも心が重くなるのだ」と随分つらい苦情を言われた。

「ロシアとの関係がこう切迫してはいよいよ戦争になるに違いないが、此の時こそ吾々が起って國家のために尽くさねばならぬ時だ。又吾々は惠州事件に際して農商務省の傳習生の身分を自ら捨てたもので、志は眞に止むを得ぬものがあつたとは言え謂は、國家に恩恵を受けて未だその恩返しもして居ない譯であるから、此の爲めにも一つ吾々が國の爲めに何かやらねばならぬと思う」というと安永も大いに同感であつた。

(1)の項続く

玄洋社先覚を慰霊・顕彰する「頭山満翁並びに玄洋社物故者慰霊祭」が玄洋社の墓所、福岡市博多区千代四丁目の崇福寺で昨年十月二日、例年通り厳肅に齋行された。

頭山翁、平岡浩太郎翁はじめ玄洋社諸先覚が、物心両面から支援した孫文の辛亥革命から百年に当たる年

頭山翁、平岡浩太郎翁は「乙丑の獄」に散華した加藤司書公と藩士を慰霊する「加藤司書公並びに勤皇党諸烈士追悼会」が昨年十月二十五日、司書公の菩提寺「節信院」（福岡市博多区御供所町）で行われ、加藤司書公の崇敬者、門徒の方々など約八十人が参列した。

追悼会は、毎年、司書公の命日のこの日「加藤司書会」の主催で行われている。嘉納浩一住職の読経が流れる中で、参列者が焼香し、司書公ら弾圧犠牲者の冥福を祈った。

加藤司書公並びに勤皇党諸烈士追悼会

### 献笛や献吟で慰霊

#### 加藤司書公並びに勤皇党諸烈士追悼会

黒田藩勤皇派弾圧事件「加藤司書公と藩士を慰霊する」の武士（もののみか）の武士（もののみか）は、如何（いか）なる事をか勤む可き...」の筑前今様会を締めくくった。

筑前維新史研究会の力武豊隆会長の、期待から敵視へと変わった藩主・黒田長

が詠い込まれている。明かす講演「長薄は司書公をどう見ていたか」で追悼

成二十二年）は尖閣列島の問題もあつたと、中国の姿勢に憂慮の念を示した。

ナ海、（石油などの天然資源をめぐり周辺国に対立がある）南シナ海に覇権を広げようとしている。昨年（平成二十二年）は尖閣列島の問題もあつたと、中国の姿勢に憂慮の念を示した。

# 革命が東アジアにもたらしたものは—

## 「辛亥革命」 100年

### 講演と学術シンポジウム開催

#### 日加中韓台の研究者が発表

孫文の「辛亥革命」から百年を記念して、清朝崩壊による国際秩序の変動が東アジアに何をもたらしたか、それが九州とどう繋がったかを探る講演会と学術シンポジウムが、昨年十月二十九、三十日の二日間にわたり福岡市中央区天神一のエルガーホールで開催された。東アジア近代史学会と福岡ユネスコ協会を軸にした事業で、日本、カナダ、中国、韓国、台湾と、国際色豊かな研究者が研究成果を発表した。辛亥革命の歴史的意味を従来の「孫文に指導された革命史」という観点からだけでなく新しい視点から見ようという試みに、両日とも会場は聴講する研究者や一般市民で埋まった。



講演するフォーゲル教授④と有馬名誉教授

#### ■講演会

二十九日は、「九州と東アジア—辛亥革命の衝撃」をテーマに講演会が開かれた。

「福岡市史」の編さん作業を進めている「福岡市史編さん室」は福岡市博物館内Ⅱの主催。同編さん室が随時開催している「福岡市

史講演会」の第七回分として開催された。講師はカナダ・ヨーク大学のジョシユア・A・フォーゲル教授と、市史編さん委員会委員長で九州大学名誉教授、有馬學氏の二人。

フォーゲル教授は、人生を懸けて孫文を支援した宮崎滔天が、自らつづつた半生記「三十三年の夢」を題材に「宮崎滔天と辛亥革命」の演題で講演した。

「中国では、あまり知られていなかった孫文が、知られるようになったのは、この本のおかげ」といい、「滔天が本を書いた三十三歳の時に、私の三十三歳の時を比べれば、私は何もできていない。滔天という、とんでもない男をわかった」と、フォーゲル教授は自身と、フォーゲル教授は自身

の滔天への傾倒ぶりを語った。

#### ■学術シンポジウム

三十日は、「辛亥革命と東アジア」のテーマで学術シンポジウムが開催された。東アジア近代史学会と福岡ユネスコ協会が構成するシンポジウム実行委員会（有馬學委員長）の主催。

部会①「辛亥革命とアジアの変容—経済・思想・文化」では四人の研究者から、部会②「王朝の解体と東ア

シアの国際政治」では、三人の研究者から研究報告があった。続いて全体会「辛亥革命と東アジア」では四人が報告したあと、井口和起・東アジア近代史学会会長の司会で、報告した四人をパネリストにパネルディスカッションが行われた。

佐賀大学の石川亮太氏は「20世紀初頭の朝中貿易—華商の活動を中心に—」のテーマで、日清戦争から第一次大戦勃発までの間の朝鮮華商の貿易活動を検討した上で、彼らの革命当時の動きを考察。「日清・日露戦争を経て、朝鮮や満州の経済は日本とより強く結びつくようになったが、上海を中心にした従来の流通システムは弱体化しながらも機能しており、日本はその影響を制御するという課題に直面した」と述べた。

有馬名誉教授の演題は「辛亥革命後の『日支親善論—第一次大戦期の中野正剛と安川敬一郎』。辛亥革命後、日本の対中国政策はどうだったかに焦点を当てたい」として「安川敬一郎日記」などをもとに、共に

中国社会科学近代史研究所の樊景河氏は「辛亥革命時期の日本とロシア帝国の対華政策などの問題に関する研究は相対的に少ない」として、公刊史料に基づいて辛亥革命時期の日露の対華政策の変遷と結果に検討を加え、報告した。



質疑も活発だったパネルディスカッション

真

# 「玄洋社に政治を学ぶ議員の会」を設立

## 福岡市議会議員

### 会長に妹尾 玄洋社 記念館 理事 27人加入

「玄洋社」から政治の本質、真の政治を学ぼうと、福岡市議会の有志議員による「玄洋社に政治を学ぶ議員の会」が設立された。

(1面参照)

明治・大正・昭和の世界の激動期に、日本の独立を守り、アジアの解放運動を

支えた玄洋社と諸先覚の足跡に触れて政治の本質を学び取り、真の政治家としての自らの感覚をさらに磨くのが目的。

昨年、頭山満翁ら玄洋社

が支援した辛亥革命が百周年を迎えたのを機に、玄洋社記念館理事で福岡市議会

## 安部理事に「旭日双光章」 受章記念の祝賀会開かれる



お孫さんから花束を贈られうれしそうな安部理事(左)と公子夫人(右)

長年に亘り水産業界の発展に多大な貢献をされた功により、平成二十三年春の叙勲で「旭日双光章」を受章された玄洋社記念館理事(株)アキラ水産代表取締役、安部泰宏氏の受章記念

出席者は全国から六百五

議員の妹尾俊見氏と、同じく玄洋社記念館理事で前福岡市議会議員の津田隆士氏が発起人となって市議会議員に加入を呼びかけた。これにに応じて市議会派、自由民主党福岡市議団所属の二十人、みらい福岡市議団所属の七人、計二十七人全員が加入した。

同年十月十九日、辛亥革命百周年記念企画展「アジアの激動と福岡ゆかりの十人を数えた。その顔ぶれも業界はもとより麻生太郎・元首相、王貞治・福岡ソフトバンクホークス取締役会長ら政・財・官・スポーツ界など各界、各層に及び安部氏の人脈の広さをうかがわせた。

安部氏は、父・篤助氏から鮮魚店に弟子入りさせられた思い出を「獅子の子落としの教えだったのだから」と語り「水産業界の発展策を模索している。これから何かわがわがてくださ」と挨拶した。安部氏は全国水産物卸組合連合会副会長などを務め、平成十七年春の褒章では藍綬褒章を受章されている。

祝賀会(発起人代表・平川眞臣(株)福岡魚市場代表取締役社長)が同年十月二日、福岡市早良区のヒルトン福岡シーホークホテルで盛大に催された。

「と」が開催中の福岡市博物館で設立総会が開かれた。

会長に妹尾氏(自民党市議団)、副会長に笠原雄氏(みらい福岡市議団会長)、相談役に津田氏を、また事務局に津田信太郎氏(自民党市議団、津田相談役の子息)を選出した。

妹尾氏は会長挨拶で「議員の会会員には玄洋社記念館賛助会員になつてもらい、記念館関連行事である広田弘毅先生顕彰祭、中野正剛先生顕彰祭などに参加してもらいたい」と述べた。

設立総会では玄洋社研究で知られる福岡地方史研究会会長、石瀧豊美氏が記念講演をした。

石瀧氏は「孫文支援では、長崎の梅屋庄吉がもてはやされているが、炭鉱経営をバックにした玄洋社が援助した資金の方がはるかに多い。玄洋社の真の姿を地元の人が理解することが大切であり、議員の会の皆さんの発言に期待がかかる」と語った。

議員の会には、まだ加入希望者があるという。妹尾氏は、新年から勉強会など本格的活動をスタートさせたい、としている。

◆前号掲載の「田村宮司が講演」について  
本紙「玄洋」百十号(昨年九月一日付)五面に掲載した「田村宮司が講演」の記事中、福岡県護国神社の田村豊彦宮司が「国家資格取得学校の同窓会総会」に招かれ講演をした、とあるのは詳しくは「国家資格取得学校、九州不動産専門学校グループ(小菅三三郎代表)の同窓会、九栄会(角洋一郎会長)の総会及び春季講演会」に招かれての講演でした。補足いたします。

### 賛助会員芳名録

(11月10日現在・敬称略)

#### ▼個人の部

- 花田 勲 (東京都) 二万円
- 池野 泰司 (福岡市) 二万円
- 西方 忍 (同) 一万円
- 山城 直之 (同) 一万円
- 牧 昭三 (福津市) 一万円
- 松下 育夫 (福津市) 一万円
- 頭山 興助 (東京都) 一万円
- 酒井 智堂 (鹿児島市) 一万円

### 謹賀新年



平成二十四年元旦

建設コンサルタント  
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理

**ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社**

代表取締役社長 花田 勲  
専務取締役 児玉 和久

本社 福岡市博多区東比恵三丁目二四一九  
〒八二・〇〇〇七 電話(092) 48-13100  
東京支社 東京都杉並区高円寺南一丁目三二一  
〒一六・〇〇三 電話(03) 5378-15800  
営業所 千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!! 21世紀の水産業界を領導するグループ

◆鮮魚卸業◆

**株式会社 アキラ水産**

代表取締役社長 安部 泰宏

本社 福岡市中央区長浜3丁目11-3  
電話02171116601(代表)

関連会社/株式会社コウトク水産

損害保険コンサルタント  
大宰府天満宮前駐車場  
漢方薬相談 とおりやんせ

有日産企画 大江田 信  
薬剤師 大江田 美子

〒818-0117 太宰府市宰府三丁目四一二十一  
☎092-2192416・二九六

造園・緑化 自然とコミュニケーション

株式会社 別府梢風園

代表取締役社長 別府 壽信

本社 〒812 福岡市東区青葉一丁目六一五三  
TEL 092-2691100(六七八代)  
FAX 092-2691145(四五五四)  
E-mail: info@souhuen.co.jp

開放型病院・臨床研修指定病院

特定医療法人

**原土井病院**

理事長 原 寛

〒813-8588  
福岡市東区青葉6丁目40番8号  
☎092-691-3881(代)  
http://www.haradoi-hospital.com/

# 玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第 53 回

## 宇田川文海『西南拾遺』(二三)

(早稲田大学図書館所蔵)

明治十二年九月刊行

小室信介

宇田川文海編輯

『西南拾遺』巻之五

小梅、再び妓籍に入る  
渡辺某、震志の行衛を  
語る

斯くて、小梅は神戸より汽車に乗り、あしがちる浪花の町に着きたりしが、五月の初つかたにて、陸と舟路に一月余も日を経たりき。浪花の町にて伯父の行衛を尋ねしに、伯父はいつしか黄泉の人となり、其血筋さへ死絶えて、養子が跡を相続させるよしなるが、是も火災の為に家を失ひ、生玉迎へ立退きしといへるのみにて、確とも知得がたければ、小梅は大に望を失ひ、彼方此方と知音を尋ぬる中、はや五月・六月・七月も過て、八月の中旬とも

東と、のひて、同所二條新地の青楼にて、津村でてふ、行灯か、げし家の芸妓となり、名さへ小蝶と改めて、二條町の遊郭に三絃の糸をあやつりて、惜からぬ命をなからへけり。  
斯くて月日に閑守もなく、八月もはや暮れゆきて、九月も事なうすぎ、十月の末つかたとなりぬれば、西の国の乱平きぬとて、官軍の兵等が続々と帰り来て、都の中へも入り込みければ、扱は無慚にも西郷殿を始めとして、薩摩の殿原はなごりなう討平らげられ玉ひしか。今迄は夫とたのむ震志ぬしの身も、若やとおもひなぐさめて居たりしに、今は頼みの綱も切れ果てぬとて、袂かつぎて打臥しぬ。



京都の街。客の口から震志の消息がつかめるかもしれないと、小梅は京都の遊郭で再び芸妓になった

されど又賊軍の中にも、運つたなく生擒となりたるものは、官の仁恵もて、首も伐たれず、懲役として助けおかる、よしを聞ては、せめては生擒の中にもあらばと、はかなくも思ひ返して、枕をもたげ、憂きが中にも賓客の前にいで、そと掻鳴す琴さへも、手重たげに音も哀れなり。  
むかし白楽天が第一・第二の絃は索々たり。秋の

あらはる、を知らでや。賓客のさゝめきて打興する様を見ては、実方朝臣が王昭君を咏めて、あし引の山かくれなるほど、ぎす(ホトトギス)きく人もなき音をや鳴くらん、といひしも思ひやられて哀れなり。

風、松を払ふて疎韻落つ。第三・第四の絃は冷々たり。夜の鶴子を思ふて籠中に鳴く。第五の絃声は最掩抑す。瀧水凍咽んで流れ得ず、と咏めしも、中々おろかなり。今様うたひ出る声とても、血に啼く思ひの  
或は客の席に待らずし、独化粧部屋に籠居る時は、窓おし開きて遠近の景色を咏めつ、天台山の高山を見れば、四十五尺の波白し。長安城の遠樹を望めば、百千万茎の蕭(ナツメ

が咏めしをおもひいで、見たせば柳桜をこきませて都ぞ春のにしきなりける、と人は咏むれど、憂ある目には、何事も物悲しうこそ見ゆめれ。  
過ぐる日、男に別れし事も思ひ出れば、万里東に來る、何の再日ぞ。一生西に望む、是長き襟なりといへる詩をもおもひやりて、筑紫の空を打咏めては、涙の乾く間ぞなき。  
斯く憂きが中にも、強て賓客の席に待りしは、賓客等の四方山打語ふ中に、西の騒ぎの事にも及べば、其れとなう男の消息聞くよしもがな、と思へばなり。  
されど運あしくや、斯る事を委しう語り出る人もあらざれば、いと本意なう日を送りたりしが、其年もくれ、翌れば明治十一年の春も事なうすぎ、五月の頃ともなりたりし一日、小梅の小蝶は例の様に賓客の席に待りしに、其賓客の一人は去年の春より此頃まで、筑前の国粕屋郡にて巡查を勤めたりし、渡辺某といへる人なるが、此度辞職なしつ、東京へ帰り途にて、西京の友垣に誘はれ、はからずも今日此樓へ登りしなりけり。